

田園回帰に関する近年の研究動向

食料・環境領域 主任研究官 田中 淳志

1. 田園回帰とは

田園回帰とは、過疎地域において都市部からの人の移住・定住の動きが活発化している現象で（小田切，2014），特に2000年代後半以降の都市住民の農山村志向を指して使われることが多く，近年特に増加しています（NHK他，2015）。田園回帰で見られる移住者は過疎地域に理想を持って移住していて，「田舎暮らし」，「外部人材」，「地域サポート人」，「交流」，「社会起業」，「継業」，「自己実現」，「地域おこし」などの，比較的ポジティブな意味合いを持つキーワードで移住が語られています。これまでの農村移住の議論での，跡継ぎとして実家の農家を継いだり，親の介護で地元でUターンをしたりといった義務や強制による移住や，リタイヤ後の定年帰農などと異なる動機を持っています。

田園回帰による移住者は移住先で自ら生業を作り，地域のコミュニティに溶け込み，コミュニティ活動を支え，地域資源を発掘するといった地域の活性化に結びつく活躍をすることも多く（筒井他，2014），そのような移住者による地域の変化，移住者を呼び込むための方法，移住者の移住目的別類型化などの研究が行われています。

そこで以下では，田園回帰に関する既存の研究成果を整理し，今後必要な研究の視点について述べます。田園回帰に結びつくような都市住民の二地域居住や都市農村交流に関する研究もありますが，ここでは取り上げません。

2. 田園回帰に関する研究の視点と成果

小田切（2016）は，田園回帰を都市住民，農山村への移住者，農山村の地域住民の3者の関係から，①人口移動論的田園回帰，②地域づくり論的田園回帰，③都市農村関係論的田園回帰の3つの視点を示しました。

①の「人口移動論的田園回帰」では，都市住民の中山間地域への移住意向を調べ，移住希望者が「リタイヤ」や「ニューライフ志向」といった目的を持っていることを明らかにした井口他（1995），Uターンをした者を「創造環境追求型」，「若者農業専心型」，「自然抱擁隠居型」，「サラリーマンマイホー

ム型」の4タイプに分け，それぞれのタイプが移住にあたって直面する問題と，地方自治体の施策のミスマッチを指摘した住田他（2001），鳥根県などを事例に，Iターン者のタイプ分けを田舎暮らし志向型，農村起業型などに分類し，Iターン者による地域社会へのインパクトを明らかにした農林水産政策研究所（2005），広島県での事例から，地方自治体のUJIターン支援施策とUJIターン数の関係を分析し，移住体験施設の移住への有効性を示した鈴木他（2011），長い年月をかけて作られた，地域による移住者受け入れ体制と移住実績について調査した西村他（2015），移住者が地域コミュニティに参加し受け入れられた要因を分析した中西（2008）の研究などがあり，地方自治体の移住推進施策，受け入れ態勢，移住希望者の類型や移住に必要なとされる条件などといった視点で，移住が成功する要因が調べられています。

②地域づくり論的田園回帰では，集落維持や農山村資源の活用に移住者など外部人材の受入の有無が大きな影響を及ぼすことを明らかにした藤井他（2009），農村の経済活性化のために地域コミュニティや自治体が移住者をどのように受け入れていけばいいのかを述べた山田（2011），移住者による新たななりわいづくりが，農山村の地域づくりとどのように結びついているのかを示した筒井他（2015），「集落支援員」や「地域おこし協力隊」といった外部からのサポート人材を活用した地域づくりが，どのようにうまくいっているのか，外部人材，受け入れ側の地域，自治体の3つの主体の関係性を整理した図司（2013），地域づくりの状況次第で，地域おこし協力隊などの外部人材の役割が変わり，全体の中での位置づけが異なることを示した佐藤他（2013）の研究などがあり，地域住民が地域づくりをする際に外部人材を活用することの重要性や，それによりどのように地域が変わったのかを調べたものが多いです。

③都市農村関係論的田園回帰では，飯山市の都市農村交流施設を中心とした都市農村交流の実態を明らかにした小山他（2015），宮崎県諸塚村の山村集落を事例に，都市からUターンした者が，木材産地ツアーなどを通じて都市住民との交流を深め，神楽

や村民文化祭などにも広がりを持った都市農村交流が展開されていることを示した佐藤（2005）、都市農村交流における受け入れ側の地元NPO法人の課題を挙げた加藤（2009）、農家の都市農村交流の意向の強弱が、地域ブランドへの取組や道の駅での販売実績をもつ地域などでより高いことを示した衣笠他（2013）の研究などがあり、都市農村交流の実態が調べられています。

3. 既往研究から見る進捗と今後の視点

移住に関わる3者（都市住民、移住者、農山村の地域住民）の活動目的や課題が様々に把握されているので、課題を解決すればおのずと移住者が増え、都市農村交流が盛んになるとも言えますが、例えば移住者の移住場所の選択は、自身や家族の年齢、家族構成、職業や自然環境など求めるライフスタイル、両親との物理的距離などで変わってくるので、目的に合致する地域を自分で探して地域に受け入れてもらうのは簡単ではありません。中間支援組織や移住支援員といった、移住を仲介する者の実態について今後研究が進められてもよいのではないのでしょうか。また、移住者が移住後に、年齢を重ねるにつれ変わっていく状況（親の介護、子供の教育や自身のリタイヤなど）に対し、どのように定住や永住をサポートするのかという視点での研究や、移住後に他出してしまった者の理由から移住者が定着しない地域の抱える課題を探るような研究が存在しません。田園回帰により変わりゆく農山村の姿は現在進行形で、今後も継続的に実態の把握が必要です。

【文献リスト】

- NHK・毎日新聞・明治大学共同調査（2015）2017年9月26日取得、<http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/249980.html>
- 井口隆史・伊藤勝久・北川泉（1995）「中山間地域における農林業生産と定住促進政策に関する意向調査の分析（I）中山間地域への移住の可能性に関して」『日本林学会誌』、77（5）
- 小田切徳美（2013）「地域づくりと地域サポート人材：－農山村における内発的発展論の具体化－」『農村計画学会誌』、32（3）
- 小田切徳美（2014）「『田園回帰』の意味」町村週報2884号、全国町村会
- 小田切徳美（2015）「農村政策の展開と到達点：農政・国土政策は何を目指しているのか（農政における『農村政策』の今日的展開と農山村社会経済の課題）」『食農資源経済論集』、66（1）
- 小田切徳美（2016）「田園回帰の概況と論点」、小田切徳美・筒井一伸編著『田園回帰の過去・現在・未来：

- 移住者と創る新しい農山村」、農山漁村文化協会
- 加藤克明（2009）「農業・農村体験の取り組みにおけるNPO法人の活用事例：取り組みの組織化における利用場面と課題の考察」『農村生活研究』、52（2）
- 衣笠智子・山口三十四・中川雅嗣（2013）「農家の都市農村交流への意識に関する計量的研究：大阪府豊能郡能勢町の農家アンケートに基づいて」『農林業問題研究』、49（1）
- 小山環・十代田朗・津々見崇（2015）「過疎地域における都市農村交流施設が中間組織として果たす役割に関する研究：長野県飯山市なべくら高原森の家を事例として」『都市計画論文集』、50（2）
- 佐藤宣子（2005）「山村社会の持続と森林資源管理の相互関係についての考察」『林業経済研究』、51（1）
- 佐藤真弓・山浦陽一・神代英昭（2013）「日本の農山村における地域づくりの現場から：外部人材の役割と内発的発展論の検討に向けて」『農村計画学会誌』、32（3）
- 岡司直也（2013）「地域サポート人材の政策的背景と評価軸の検討」『農村計画学会誌』、32（3）
- 鈴木健史・森尾淳・内山久雄・寺部慎太郎（2011）「広島県におけるUJIターンの要因に関する研究：地域の特徴、UJIターン支援施策からみた分析」『都市計画論文集』、46（3）
- 住田和則・渡邊貴介・羽生冬佳（2001）「地方自治体におけるUIターン施策に関する研究」『都市計画論文集』、36
- 筒井一伸・嵩和夫・佐久間康富（2014）「移住者の地域起業による農山村再生」、JC総研ブックレット
- 筒井一伸・佐久間康富・嵩和雄（2015）「都市から農山村への移住と地域再生：移住者の起業・継業の視点から」『農村計画学会誌』、34（1）
- 中西宏彰（2008）「田舎暮らしにおける新規定住者と農村側住民の共住に関する研究：京都府南丹市美山町S集落を事例として」『農林業問題研究』、44（1）
- 西村亮介・嘉名光市・佐久間康富（2015）「過疎地域の地区運営活動における地元住民と移住者の関係の変遷に関する研究：－和歌山県那智勝浦町色川地区を事例に－」『都市計画論文集』、50（3）
- 農林水産政策研究所（2005）「公的機関の定住対策とIターン者の実態－島根県のケーススタディー－」、ライフスタイルプロジェクト研究資料第2号
- 藤井多起・垂水亜紀・藤原三夫（2009）「農山村集落類型と集落維持・資源管理の可能性」『日本森林学会誌』、91（6）
- 山田晴義（2011）「農村移住による農村再生のための計画的課題と展望」『農村計画学会誌』、29（4）